

興逆 法縁

叔迷覚

御遠忌テーマ

親鸞さま、なぜ、お念仏なの？

— 出会おう、語ろう、今ここで！ —



講題を「真宗遇(あ)い匠(が)たし」としました。この「匠」というのは、不可能という意味だそうです。「念仏成仏これ真宗」と言いますよね。だから念仏に遇えないということです。念仏をこうして称えているのは不思議で、もし児玉暁洋先生に遇っていなかったら、実現しなかったですね。念仏など、呪文のようなものは口が裂けても唱えまいと思っていました。資料の一番最初に、「真に効能があるか無いかと云ふことは、自分に実験したる上の話である」(清沢満之『わが信念』)とあります。

大谷大学の先生が日曜講演で、「聴く・聞く・効く」という題名で話されたんです。「聴く」は、耳に聴くんです。「聞く」は、正確に言う心と心に聞こえてくる。そして最後の「効く」は、ここが大事なんです、身に効いてくる。お念仏は妙薬にたとえられますね。

この「効く」は、「これは効くから飲みなさい」と善知識から勧められて、飲む。それが体に効いたか、自分の身でお念仏に効き目があるかどうか実験し、

体験することが大事です。

兄の死

今年1月8日に、二つ違いでまもなく66歳になろうとしてた兄が急に亡くなりました。僕は今まで聞法らしいこととしてたんですが、木っ端微塵になるような経験があつて、今でも余震が続いている感じなんです。その時にやはりお念仏の効き目を体験しました。

現世利益和讃に

真宗遇い匠し

荒木半次先生

(京都府 城陽作業所・作業支援員)

2019年8月17日

ことを体験しました。北陸の人は「お障りさま」って言うんです。味わい深い言葉ですね。しかも重ければ重いほど、お念仏の効き目がはつきりと自分の身に実験できると思いました。

兄は長男なので世間の切り盛りや親類のつきあいも皆してくれました。そのおはちが僕に回ってきて、僕はそれが全然できない人間なので、それだけで大変

かに押さえつけてくれるという状態が続きました。いつの間にかお念仏を称えつつ安心して寝入ってました。その時、「念仏は息や」って思いました。兄が亡くなって体験したことで一番大事なことは、「念仏は息である」ということです。

念仏は如来の息

木村無相さんも、「念仏が息をする」と言っておられます。

一息 一息 如来の息

我は仏に非ざれど
如来は我に息したもう

この詩の背景には、曾我先生の「如来、我となりて我を救いたもう」という言葉があるのでしようが、「如来、念仏の息となりて我を生かしたもう」、念仏は息やと実感しました。

これも無相さんの詩ですが、

ご縁 ご縁 みなご縁
困ったことも みなご縁
ナムアミダブツに遇うご縁
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

北陸の門徒さんの家には「思い通りにならざることを喜ばん」と書いた紙が貼ってあるそうですよ。困ったことはナンマンダブツに遇うご縁なんです、だから

一切の功德にすぐれたる南無阿弥陀仏をとناولれば三世の重障みなながらかならず転じて軽微なりとある。三世とは、過去・現在・未来。重障は思い通りにならぬこと。僕には、兄が亡くなったことは大きな障りでした。でもお念仏を称えると、必ず担いやすいものに転じてくださる。そういうのはたらきが念仏にある

でした。

葬儀が終わって何日かして、不安か何かが胸に迫ってきて夜に息が出来なくなり、このまま窒息して死ぬのかなと思うような瞬間があつたんです。その時やっぱり出てきたのはお念仏でした。念仏を称えていると、この胸の辺りにお念仏が広い空間を作って、おなかの底から盛り上がってくる不安をお念仏が静

ら喜べるんです。

「逆縁 興法」、このことで

「法が興るってことは、念仏も
うさんとおもいたつ心がおこる
ことですよね」と言ったら、

「それは、ええことに気づいた
な」とちよつとだけ児玉先生
から褒められました。取り返し

のつかない事態に遭遇して、初
めて自分の中に念仏もうさんと
おもいたつ心が興る。そのたび

ごとに、念仏が自分の中に深まっ
ていくことを経験していくんや
なあとありますね。自分の一生

は「逆縁興法」というこの言葉
に表せるかなと思つています。
念仏が息であるということ、

浅原才市さんにもこんな詩があ
ります。

出る息が南無

引く息が阿弥陀仏

出入りの息こそうれしな

むあみだぶつ

息の間もなむあみだぶつ

「出る息」つまり吐き出す息は
自我ですよ。自我を吐き出すと、
おのずから自分の中に吸い込ま

れてくるのが阿弥陀仏です。本
当に素晴らしい詩だと思います。

児玉先生も「如来の本願が私

のいのちとなったその証、その
徴が南無阿弥陀仏。南無阿弥陀
仏はだから本願の呼吸です」と
言われています。

「私の念仏」は、本当は「我
の称名」ですよ。この間に

「聞名」ということがあります。

名号・聞名・称名、これが本
当に大事で、名号は如来の名号
であつて私の名号なんてことは

あり得ない。如来の名告りであ
るその名を聞く、名が届く、心
に聞こえてきて、私の称名があ

るのです。念仏を、名号・聞名・
称名の三つに分けて正確に理解
しないといけないと思います。

念仏の薬を用いよ

「ナンマンダブツ」はよく効

く妙薬だから服用しなさいと、
私達に阿弥陀さんが呼びかけて
くださっているんです。「我が

名を称えよ」とは「我が名を用
いよ」という如来大悲のおすす
めだったと無相さんも言ってい

ます。ナンマンダブツと口に出
して用いるほかに助かる道がな
い自分であつたと。

毎年、清水寺の管長さんが、
この一年を象徴する漢字を書か
はりますね。僕は自分の一生を

漢字一文字で書いたらどんな字
になるんだろうと思つた。フツ

と思いついた言葉はとても恐ろ
しいんですけど「誑」―「たぶ
らかす」と読むんです。も一つ
は「訛」―「なまる」と読んで、
人を化かす、たぶらかす、こと

です。いろんな人を誑かして生
きてきたんです。人を誑かす前
には、それ以上に自分を誑かし

ている。今ここでしゃべってま
すけど、やっぱりどこかで自分
を、皆さんを誑かしてると思ひ
ます。

「そのまま」とこのまま

浄土真宗の救いは「そのまま」

です。そのことで『香樹院金
言録』に二つの逸話が並べて書
かれていますので紹介します。

一つ目は江州・醒ヶ井の婆々
さんで、香樹院師から「婆々、
そのままのお助けじゃぞや」と

言われて、「ありがとうござい
ます。いよいよこのままのお助
けでござりますか」と答えると、

香樹院師は「そうではない。そ
のままのお助けじゃ。仰せを持
ちかえるなよ」と言われたとい

う。
二つ目は、濃州のおせきに対

して香樹院師が「おせき、今度
の極楽まいりはどうじゃ」と問
うたところ、おせきは「へい、
これなりでござります」と答え
たという。香樹院師は後に「お

せきは、よくきいたな」と仰
せられたという。

「そのまま」を「このまま」
ともちかえた婆々さん、一方お
せきさんは「これなりでござい
ます」と答えている。「このま

ま」は自己肯定であるけれど、
「これなり」のほうは「そのま
ま」の仰せの聞こえずめの中に
あつての「これなり」であるか

ら、これよりほかに仕方のない
自分がつねに見える故に、「そ
のまま」の仰せがつねに聞こえ
るのである。

この聞こえると見えるとは一
つである、と松原致遠先生は領
解されている。そのままの姿を

さらけ出せるのは、ナンマンダ
ブツというお念仏がなければで
きないのでしよう。

児玉暁洋先生との出遇いから
満天星舎同朋の会という聞法会
を開いていただいたのですが、

その第一回目の最後に「称名と
いうとき、なぜ阿弥陀仏という

名ではだめなんですか？」と僕
が質問したんです。先生はドー
ンと机をたたいて「そんな聞き
ようで百万年聞いても、わかる
か！」っておっしゃいました。

その後、先生は「あなたに宿題
をあげるから、一生かかって考
えなさい。人間像としては法蔵
菩薩、言葉としては南無阿弥陀
仏。この意味についてずっと考
えてください」と言つて下さい
ました。

聞き書き担当者・感想

お話の中に何度も何度も、自
分自身で実験・体験せよと言わ
れています。その中から「自ず
と念仏が出てくる」と。

たくさんの資料とたくさんの
熱い思いのお話を、時間が足り
ないくらい話され、聞法への熱
意が伝わってきました。「念仏
が素直に称えられているのか？」

と、深く心に受けとめさせられ
ました。 若林 範子

第20回 (10月12日)

「親鸞聖人と聖徳太子」

横川 香正 先生

(佐伯市 善正寺住職)